

買ってきたものを冷蔵庫に入れ一休みをするためにヒマリがベッドに横になるとブアレフオールが上に覆いかぶさってきた。

「ちょっと！」

「セックスをさせろ」

「まだ夜中じゃないよ？」

「ベッドというのは休む・寝る・セックスをする場所だろ？」

その言葉は依然ヒマリがブアレフオールに話したネット記事での言葉だった。

「覚えていたんだ？」

「そりゃあそうさ。俺たちは記憶力がいい」

「やることないから記憶力がいいだけなんじゃないの？」

「うるさい」

そうやってブアレフオールはヒマリと自分の唇を重ねると何回か戯れるようにこすりつけてきた。

そして上下の唇を交互に甘噛みするのを何回か繰り返す。

ヒマリはこのブアレフオールのやり方は最初自分をじらしているのかと思っていたが、何回セックスをしても必ずやってくるので単純に彼の趣味なのだと
いうことを理解した。

唇に甘噛みをした後はブアレフオールの舌尖がヒマリの口の中に潜入してくる。

ねっとり唾液を絡み付けたまま潜入してくるブアレフオールの舌尖は人間でいえばスプリットタン。

同時に口の中に入ってくるが動かせばヒマリの舌尖を上下で挟み今まで感じたことがないディーブキスを感じさせた。

「・・・ん・・・」

ねっとりとした先が絡みついてくる間、ブアレフオールの指先はヒマリのブラウスのボタンをはずしブラジャー越しに胸を愛撫し始めた。

「はあ・・・ブアレ、ブラ外すから少し待っていて」

「ん」